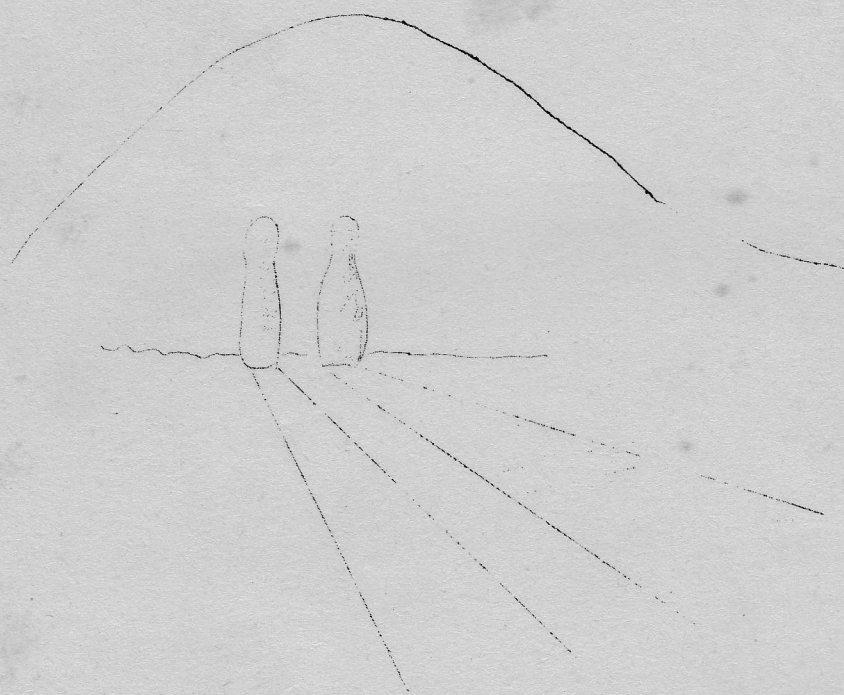


のすたるじま

創刊号



名古屋大学郷土研究会

目 次

のすたるじす食刊に際して	-----	1 ページ
平山先生寄稿文	-----	3,
桶狭間へ行て	----- 山岸章	7
無題	----- 鈴木克祝	8
種子	----- 桶口清司	9
桶狭間へ	----- 一年某君	9
桶狭間実地踏査観想文	----- 鈴木克祝	11
古戦場のくろ(1)桶狭間	----- 桶口清司	12
レポート	----- 一年某君	13
居眠りノート	-----	14
研究発表	----- 松山博	15
郷研のこと	----- 桶口清司	17
孤 独	----- 松山博	19
学生の文化活動	----- 高島英明	20
のすたるじす	----- 津坂幸隆	22
郷研すかんむる(1)	-----	23

のすたるじす 創刊に際して

片山勝治

中学生の時、学校へ先生から「君や希望は大きい程良い、いすれは小さく存って行くものだから」と聞いたことがあり、それが最も、進歩への言葉が思い出されます。我々「創土研究会」が今年三月、徳島県立の野田中学校の宿直室で特選を語り合ひ、第一歩を踏み出して以来、今日に至るまでを振り返って、みごと必ずしも初めの計画通りに進んで来なかったことを認めざるを得ません。入会希望を表示した新入生も最初の頃は十四、五名にすぎたが、現在では、さうしたかたで、残っているのは五本の指で数えるにすぎない、だとしても、活動の充実度を示す一つ、バレーボールを見て、「いい感じ、エフ、そこには私自身が日常の雑事や感情を性格に終れろり人間として、の価値観が変えたりして、全長こし

この責任を果して来なかったことが、一つの悔を存していると思ひ反省している次第です。しかし、共同活動とは良いしたもので、二年生迄もモクモクと存するべく、成長し少数ながら意欲的な一年生迄も出て来たことは、非常に喜ばしいことで、思い出す。活動面では四月の桶狭間シリーズより、総じて名大祭への参加、夏休みの島中仙道踏査、そして今度の「名大屋敷」として、ますます毎週の学習会と、つて来りました。と、かくも、私自身は、人間的にも活動面でも、一つの流れがつくられてきたというところで、これからの高さが、就き、こころよく、同一門前上を回って、いくの、ではなくして、どんなにゆるいカーブでも、一へりせん、形を描いて、昇して行く、たう、我々はその、可能性が見出せるに、違いありません。これは、進歩は、どうして、こんなことを、している、たう、か、よ、そのクラブが、羽振りよくや、て、いろいろの、進歩は、どうして、こんな、存に、自立、た、め、こ、を、せ、止、げ、な、る、な、い、の、か、と、い、う、や、う、な、こ、は、私自身、今、で、何、度、も、考、えて、来、た、し、現、在、で、も、時、々、疑問に、思、う、こ、が、あ、り、ま、す、こ、で、新、年、の、多、数、が、関、心、を、示、し、

多様な会員の積極的参加がカギ！

—— 平山教養部教授クラブを語る。

まがりなりにも郷土研究会の名を掲げて発足したわけクラブは何と
言っても会員自体が未熟なものであるから始めて飛躍した力もな
みないなもので何時落っこちるかも知れない。そこで何らかの指針を下の
で見識曲豆かな平山教授に一筆願うことにした。多忙中何度も無理を
申し上げてのことであるから我々もバイトに勉強に（？）忙しいのに甘えるこ
となく真摯な態度であらゆるものを吸収しゆがサークルの強力な発
展に尽力しようではないか。以下は教授の草稿である。

思いつくままに

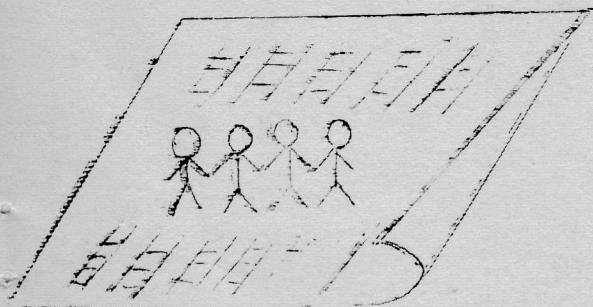
(その二)自己表現による向上

今度諸君が機関誌を持つことになったそうであ
るが、大変結構なことと思う。それは諸君
のサークル又はクラブメンバーの共通の活
場としてメンバー相互間のより内的なコミュ

ニケーションの最上の道具として極めて
有意義であることはあるたので指摘するま
でもないだろうから。ミニでは雑誌をもつ
ことの別の効用について触れてみよう。
雑誌を持つたかすには、メンバー各々が

ひとりのことを書くことが何より大切な
 ことである。雑誌を持つことの意義は書く
 ことを通じて始めて表われるものである。
 書くことは自己を表現することであるが、
 この表現ということは自己を確かめ、或は自
 己を追求する事に基づいて行われるのである。
 表現は自己を以て一つの形として現れし、自
 己をその客観として眺める唯一の方法で
 ある。従って表現するものは、自分が体
 験的内容として直接的に持つものが、しかし
 ある場合には遠くを以て、ある場合には混沌
 としたまま感得下り又は考へたりして持つ
 こと、これは一つの形を調整せねばならぬ、
 つまり明確化せねばならぬわけである。
 我々が書くことによつて、表現を通じて、

自己の内面をあらわにし自己を眺め自己を
 確かめ、そのことによつて深く自己を追求
 しそして豊かにすることから来る。新聞報
 誌を持つたがらには、結果は深くこの点に
 思いをめぐり、所が残るべき事、よう
 に努めることである。そうすることによつ
 て、メンバー相互間のより内的コミュニケーション
 が可能となる
 下けて多く自己自身の
 成長が保証される
 いう二重の効用が
 はまねてくるので
 ある。



その三、 楽しかった自然愛好クラブ の 会員構成は多様的に

君達から 学生時代のクラブやサークル
についての思い出を書いてくれとの注文で
あったのでさういふものについて思い出
を出さないとつづいてみよう。今でも楽しい思
ひ出となつて残つてゐるさういふ種類の
ものの一つに「自然愛好クラブ」がある。
それは学生時代のことではなく、大学を出
て何年経つた頃のことである。このクラ
ブへ入つたというより引張り込まれたのは
、私の教えていたある大学の教養子の世話
である。構成メンバーは各種大学の男女の

学生のほかには色とりどりの自由職業人――
詩人、画家、音楽家、教師、評論家等々――
を加えた総勢三十数人のクラブであつた。
企画は主に学生委員がたて、夏の間は時
気候の快適な時に、溪谷や高原にテントを用
意し、食料を用意して出かける。一、二泊の
日数でテントを張り、自然のふところだ。
男女中年の区別なしに、歩きかつ語つたも
のである。このクラブの楽しさは自然のふ
ところと飛び込んだ生活であつたといふ
ことの他に、メンバーが両性にわたつてゐた
さういふこと、年令層が広かつたこと、学生
の他に各種の自由職業人が参加してゐたこと、

なごにあつた。下下である。高原や溪谷の
キャンピングで、豊富な話題について傾聴し
たり討論したりしたものである。このクラ
ブの楽しかった思い出が、諸君にするため
にこゝはクラブである
サークルである、会員は
出来るだけ多様性を
もたせてつづることに
出来るならば学生だけ
でなく、学生だけの
も同じ学校だけに



限らないこと、その他の人々、例えば教官
などにも参加してもらうこと、チームにつ
いて討論する場合でも時には溪谷や高原に
出かけて共に語りあふこと、等々である。
……この種の過去の思い出はいろいろとつ
なが、又の機会にやぶること、……諸君
のクラブの充実と発展、そして本誌の一つが
ない成長を祈って欄筆することにする。

（筆者は教養部社会学教授
御多忙の折執筆願ったため）
尚見出しとし絵は編者入



桶狭間へ行つて

山岸 章

まず先日は初めて入った僕に親しくして下さり僕に郷土研究会を続けて行くこうと決心させて下さった先輩諸氏に感謝を述べたいと思います。

僕は大学に入る前には、文学や歴史に出て来る土地を訪ずりたいとか、又それらのことを研究したいと思つて、ました。この郷土研究会はまさに僕の思つていたサークルです。以前に僕はワシグルに入つて、その裏を期待していましたが、それが破れて今は郷土研究会に安住の地を求め得られた様な見持です。

さて、桶狭間へ行つた時の反省をしたいと思います。まず僕が僕は桶狭間かどうか言うよりまず先に先日の行動について思つた事を述べさせてもらいます。まず第一に道順ですが、あの時はなるべく事実に基づいて言うことをして、それがそれなりに良く又道を変えるのも良いですが、僕としてはもっと先に調べた方がいいのでは通れませんか、厳密に行なうべきだと思ひました。次に時間ですがあまりに早く終つた感じがしました。もうちょっと関連

箇所を回れば良かったと思います。このこととならうと思ふのは統卒力のことです。行く前にどこへ行くと決めておいてぐんぐん行つて行けば良いと思ひます。しかし、それはあくまでも全員の賛成のもとです。さて桶狭間その物については僕は単に信長の奇襲とかだけでなくその背後、状況等を考える必要があるのではないかと思ひます。そして更に栄枯盛衰と見るのではなく歴史的発展の一部として確實に認めて行くべきだと思ひます。僕の考えはまだ未熟で先輩の下考えとは違ふかもしれませんが、せめて、せめて、せめて御指導下さい。

この原稿は昭和45年5月に桶狭間へ実地調査した後の原稿です。山岸氏若冠バオリ意見編輯した時のもの。

人間五十年、下転の内をくらぶれば、夢幻の如くなり

なり

敦盛

鈴木克祝

中学校へ入学して以来ずっと語学に対する苦勞の絶え間がありました。(實はどうかは知りませんが、僕の場合は特にそう)わからぬ単語を調べろのも、いいかげんいやになりが、又の意味がうまくとれない場合はそれが一層拍車をかける。先生にあてられれば、文句を言われぬ程度にお茶をにごさねばならぬ。英語はもう七年以上も学んでいなのに、ろくに日常の会話も出来かねるのが現状です。昨日もある教会へ行つて来たが、その外人が話した簡単な事もなくかとうえにくい。普通の会話のスピードにはとてもついていけないし、又僕には母音の区別が会話中にては余りはつきりつかないからです。又何々の単語についてその都度日本語になおしてゐるの加減です。やはりその単語のまま覚えておかなければならぬ。思ふのです。落胆の気持ちと同時に今までの勉強の任が残念に思われ、任がありません。何かかたい話になったからこゝでやめよう。何とかところで僕は家では一番年下です。だから生ま

れてこのかた、いつも頭が上らずどおしたか長男は男の子が生まれたので、僕の子供にもしようと体操中など、かわいがつてやうのもつたす。幼児の成長過程を見た事のない僕だから、いろいろ興味を持つてながめてゐる。幼児達一般について言える事は、たゞ物のする事を非常に良く覚えてゐる。自分の物としてゆく吸収力です。全く何もわからぬ状態、覚えてゐる手段さえもわからない状態から、ほんの小さな事ながらそれを覚えてゆくという事は非常に困難な事でありました。僕が、ある事を覚えて、使えるようになるには、その以前の言葉とか他の多くの要素が積みあげられてからこそ出来るのです。全く初期の段階で、その状態から、自分の状態へ移行する。何と不思議な事でしようか。神の存在を理由づける一つに、こんなものがある。言葉の花はを考へる、則ち、僕には親から教しえられてまかりなりにも、話す。親はその親から教えられ、ずつと昔にさへ上つて最も初めはどうであるか。そこには超自然的力が働いたのではないかと。

「種子」

クラブ雑感

樋口清司

郷土研究会、こりいかつい名前、同行会、春ま
去年の二月初旬、名大構内にその種子が舞
いおりた。どのにも知られず、春の陽を待ちあび
ている。どんな花が咲くのか？土中で、名大構内
の片隅で春の発芽を待っている。それはどこから
飛んできたのか。バスハイクというか、あった
サークルの分裂？の風に乗ってきた。又風が吹け
ばどこかへ飛んで行くのだろうか。いや彼はもう
着々と活動している。この地で発芽しよう。

「文」連の開花した春の庭のような華さはここに
はない。冷たい木枯しと出芽をはばむ大地があ
だか堅い種子のその内で黙々と働いている。何
を望んで。真紅に燃えるカンナの花、春の豪華
な桜、いや、そんな芽は見ていう小ない。この厳
しい試練に耐えられるだろうか。うまく発芽するだ
ろうか。

誰か言う。俺は世界中のすべての花を総合した
ような花を咲せる。そんな発芽を。又誰かはい

う。「おのれをしつかり見つめ、華さにおぼれぬ花
を咲かせたいと。又……は……」
どんな花が咲くのか？。誰にもわからぬ。
し、しつかりとした発芽を基礎に、たとへば
うまうとも、立派な実のあつものにした。又
ムズな成長への基礎を固めた。いびきうけきう
いびきしくも山吹の花にはなりたくない。

——この原稿は樋口君一年の時のもの

桶狭間へ

報告 無記名

昭和41年新生校発足踏査

前日の雨で多少に配されたが、朝方には太陽が
のぞく様になった。予定では午前5時半までに名
鉄電車神宮前駅に集合であったが、僕が着いた8
時10分頃には、一人しかいなかった。予定は守ら
れないものであり、名大屋時間には日本標準時より
30分遅れていうようだ。9時少し過ぎに出発。総
員11名、一年生は僕を含めて五名、一年生の数が
以外に少なかった。あと2名は来るものと思つて

に、でもこの位の人数でもうど良いのか
知れない。

まず最初熱田神宮に行く。正月には毎年欠かさ
ず参拝に行くので、熱田神宮についてはかなり知
っているつもりだが、宝物館や能楽堂を始めて見
て、おや、こんな所にこんな建物があると思っ
た。熱田神宮へ来る時は、いつもすごい混雑で、一々
建物を見物している暇はないからだ。でもいつも
にくらべて静かな神宮は仲々いいものだ。鳩は鳩
くし、緑も美しい。

神宮を出てからは真直ぐ東へ向う。牛巻を過ぎ
瑞穂に近づく頃足にちずつと疲れが来た。荷たさ
れていつと立っている疲れより、この様子は足さ動
かしている時に起こる疲れのほうがずつと気が良
い。自転車をよく乗り廻すので、自分の足んぐい
る誇りはか輪、名古屋市の中南部地域の地理はか
なり明るく、そこらあたりも以前通った事がある
ので周囲の景色もさ程めずらしくもない。が桜本
町より東はまだ行った事がなかったのだ。興味の
ある所だった。知らない土地を歩くことは更に面
白い事だ。この道をずつと行けば一体どこへ出る
のだろうか。珍らしい建物があつたぞ、等と思ひな

から歩く。そして、ふと自分の記憶していた
の名前とが建物とか道端とかにぶつかる。
かてうなりのかと思つてうれしくなる。

瑞穂通四丁目まで右手に折れ、桜本町一丁目まで
ずつと南に進む。仲々軽快なテンポとスピードで
調子がいい。桜本町で左に回り、復て東へ向か
う。朝方晴れていたものの荷が頼りない感じの空
模様だった。が、やはり西の空には黒雲が一面に
かつてきた。まさに信長のその日を再現するかの
様だが、雨具を持たない者にとっては、困った事
である。黒雲のスピードより早く我々が歩けば雨
に降られぬいでずむが、そんな訳には行かず、ま
もなく雨に降られ、一軒の菓子屋、兼食堂に避難。
寒冷前線の影郷とかで、その雨もしばうくしてあ
がつたが、今度は多少寒くなってきた。お好み焼
きと三つ豆を食しただけで、そこを出て右手へと坂
道をのぼる。歩いていくともう丹下の塔だった。
ここまではすぐの様だが、時間的には熱田
を出発してからかなりの時間が立っていた。丹下
の塔は見晴しのよい所にある。ちやうど名古屋の
面に伸びた台地の先端にあつた感じだ。た
から名古屋方面は、南部地帯から栄町等の中心部
まで一望の下に見えた。ものの反対に東の方

鳴海方面は良、見渡せない。建物のせいもあるだろうし、音と今とでは地形的差異があるのであらうが、これに織田方の砦と考えるには疑問が残った。後に調べて見ると、やはり丹下の砦は織田であつた。

また歩く。お昼もすぎ、腹も減つてきた。しいにあたりかたにぎやかになつていく。もう鳴海の町中に入つたのであうか？三番目の目的地鳴海城趾に着く。今は完全に町中であり、あたりより多少高い車を除けば、城のあつたことを証拠たてゐるものはない。たゞ昭和18年に立てられたここに鳴海城ありきを示す石碑あるのみ。また雨が降り出した。お寺の鐘つき堂に避難。今度はしばらくくやみそうにない。ここで昼食。実に寒い。そこで駅近くのたいこ焼屋に場所を移す。やつとほつとした。結局この旅行は鳴海で中止となつた。中止と決まり、駅につくと急に疲れがでてきた。ホツとしたのかも知れない。とにかくこんなに長い距離を歩いたのは始めてだ。但し家に帰つてから大変だつた。すぐに足一面にサロメチルを塗る。そして横になつたが足が痛く思う様には休めなかつた。寝る前、風呂からでて、又サロメチルを塗る。それで翌朝口人並にもどつた。

(昭和41年5月新入生歓迎会より)
の感想です)

□34 鈴木克祝

今度の実地踏査は都合で下準備が出来なかつた為、興味加うすれた感じがしました。人員は適当と思ひます(やはり余り多人数ではうまくいかないと思ひます)。調査地にては寺社等を訪れ、参考資料や説明を求めらるゝのも良いと思ふ。下準備は十分すべきです。時間にとう小れる必要はないと思ふ。実地踏査当日や、時間的に遅れたが、もう少し細かい計画が必要。



郷土研究会に入っている。他校との合同での活動がほとんどなされたい。という事で入りました。名大独自の活動でやつてほしいと思います。多人数でバウバウでは本来の目的がたがえ、研究内容も浅い物になると思われるから。

(昭和40年彼が入学時の感想です)

古戦場めぐりの桶狭間

5134 桶狭間 清司

昨日入会したばかり、なにもわからぬまゝに参加、期待と不安入混り、ちやうど信長が清須を出て落着かぬ心持と似がった。ものがあるかもしれない。そんな快い空想を胸に清須の城をいや自宅を出た。集金地熱田神宮へは八時三十分きっかりについた。名鉄線不慣れが、それとも早朝六時起床で眠ぼけていたのか神宮前をはるかに乗越し、大江駅まで乗り越してしまつた。はしたない、見なれぬ先輩諸氏と混って神宮参拝後、いよいよ歩行が始った。井戸田南や松町停留所をすぎ野並へさしかかると道路の両側は麦畑や水田、すっかり気分が出てきた。鳴海城跡や善照寺(金勝寺)を探しその高台から東をのぞめば信長がに境いかなるも

のだった。とうとうと回想、空想に陥おつた。信長が軍を進めたという間道と平行して走る鎌倉街道をさゆやかな五月の風をうけて足輕を連想しながら進軍した。疲労も少々出てきたが空気がうまい。天気もよし、歩く事の素晴らしさに味わつた。鎌倉街道をはずれ間道へ再突入、畑と丘陵は中世戦国の世ののどがな一面を思い出すには十分であった。その静かな平和、戦乱の急つぎ、意の前静けさかとも思われる。相原郷をすぎたあたり、前並の鎌倉街道をはずれた山道をすすめはなすかなスロープがいくつも重なり華平原を思い起す。絶好のハイキングコースだ。一ツツ小さい丘を登り下りして桶狭間へと進軍するけれど目的は遠い。疲れも感じぬままには戦口の世、豪将に長に引っぱられる足輕だ。風を五月、曇晴の一日、一語、歴史と現実の接点、名鉄、国道一号線、横切り、高德院の丘が見えてきた。その丘を一点にかけおいた。信長みごと義元打ちとった。すぐ下に墓があった。いかにもさく風雨にさらされた跡は一目でわかつた。しかし義元の墓付近よりも僕たちが歩いてきた国道、名鉄を横切る前の丘陵地帯に囲まれた盆地状の地が戦場としてびつたり

だ。信長のコース、たしかに歩いてみて実感かわ
いてきた。三百年以上前の昔を身体で感じるこ
が出来たりは全く楽しい。この踏査、まず歩くこ
とのすばらしさを改めて知っていた。ただ入会直
後の僕は予備調査がしてなかった事が残念でなら
ない。現地になって、当時の武将が思いめぐらした
数々の軍事作戦、そんなものを研究したかった。
ある土地の老人いわく「恋」という字は知らんけど！
……人間は三百年前も今も同じだよ。いまも耳
の奥で熱弁をふるっている。土地の人の話もよく
聞いてその地を少しでも理解することも意義深い
ことだと思う。なによりピクニック気分がN.Y.
に負うず、アカデミックな面を前面に出すことが
重要だと思う。今度、調査で現地においてもう少し
の余裕が欲しかったし、そこでみんなで検討し、討
論して調査を深めようというと思うが、とにかく最
初の活動として、信長の勝利の喜びに劣ぬくらい
楽しく有意義なものだった。

昭和40年5月26日記
(楠工君がまた新鮮で……だった時のもの)

レポート

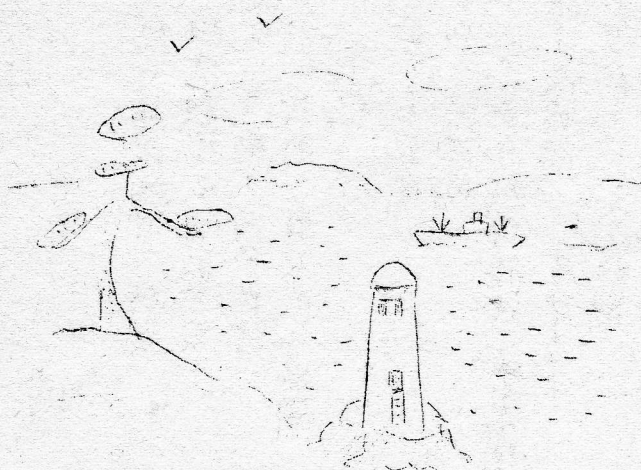
'66.5.7.

某氏

過日の桶狭間実地踏査は天候にめぐまれず、そ
の計画を十分実行することができず、それ自身意
味をなさなかった。「人生は無意味である」とい
う誰かが、私は以前からそれに肯定的であって、そ
れは人生が非理性的で偶然であることに由来す
ることを考えた。その意味において人間のたまたま計画
が自然の前にもうくも崩れ去っていくことは何ら
不思議ではない。また人生を構成する一部品であ
る行事が無意味であるのも無理ではない。
私が入部の際に際して希望したことは、集団の中の
個人個人でなく、個人同士の集合としての集団で
あってほしいということであった。先日の実地踏
査を例にとると、桶狭間へ行くのだということの
みが、その集団の目的であればよいと思う。中に
は写真マニアもいるだろうし、戦略研究者もいる
だろうし、石ブームにあやかった採石愛好者もい
るだろう。ある一つのテーマを決めて、それを深
く掘り下げ探究するよりむしろそのテーマを替
え、個人の時性と興味に従って考えていく方がよ
いと思う。そうしたいわけはバク然とした断片を統

合しつづきのテーマをより鮮明なものにするこ
 ができれば最上である。

作家、エルートヴィヒはこの著シニリーコン
 の頭を次のようにのべている。「こうだから、
 こうだと型で押していくのでなく、その人物の全
 体像を造形するのかわたしの原則である」私はこ
 のことが、テーマを研究していく上に応用でき
 ると思う。



伊良湖岬の思い出

居眠りノート

「俺はバスに乗るとまずその足を見ろ。ジロジロ
 ジロとヨック観望する。栄養のわたり具合はどう
 か。もの生え具合は、形は……」と、そいてたいて
 いの場合、自分、自分の大根足を自取後に思
 い浮かべてたのを見をつまなからバスを降り
 るのである。」

(ある自然科学者H教官)

「よしとその時マルクスは決心した。そして
 七年間の斗争の末、彼は四才年上の美せジェ
 ニナと勝ち取ったのである。」

(ある社会科学者のノートより)

昔々、教養部に目かまめるようなカワコ子
 ちゃんがいきました。その子はまてまての女性
 格な、か食堂で、いつも「定食」を注文
 していました。春秋めくり、彼女が「定食」をして
 知られようになりました。それと共に生協の
 学業成績も上がったとか何とか。

(重乳根々意地悪子)

研究発表

松山 博

信長の行動並所要時間の研究

大高よりの注進到着より出発まで

一、将士を集める為の所要時間

最少限一時間、最大限二時間

∴ 早朝

二、軍議に要せし時間

三十分、一時間

∴ 各方面の戦況聴取、意見聞

三、出発諸準備時間 考定せず

四、清州より熱田に至る時間

行程 約四里弱 速くとも一時間

五、熱田神宮参拝、人心集攬、必勝の信念獲得

速くとも一時間

六、熱田より鳴海に至る一時間

行程 約二里強 約二時間

以上小計 万々四時間

七、鳴海附近の警戒配備、兵力集結

敵情案内人里議

何れにしても三、四時間

④ 大高より清州注進致着時刻研究

鷲津丸根、二岩陥落 合戦記 11日未明

午前三、四時の間

八、二岩陥落の注進が清州に到着する為の所用

時間

午前二時出発

大高より清州まで行程 約6里

速馬最大速度 約三時間

九、大高よりの注進致着時刻

速くとも 午前五時

十、信長の清州出発時刻

速くとも 午前六時半、午前八時頃

總当とする

十一、熱田到着

午前十一時頃 出発 正午頃

十二、鳴海到着

午後二時頃

十三、鳴海にて奇襲部署を定め行動を開始し得る

時刻 午後五時、六時

十四、善照寺→山道→相原郷り北→山道→

田楽狭間

約一里半の行程、少くとも一時間半要す

午後六時八分

夜襲

前研究、合戦記に基き、落城の未明を午前三時と判定せり。

由來記 義元午前五時、沓掛本營にあり、

二砦の陥落近きに在りとの情報を得る、
大高より沓掛 約二里、夜間速馬 約二時間弱

に都合よい。

今川勢の行動につきは昼夜襲を判断す。

由來記 義元前日午前五時頃沓掛本營に在り、
一、出発までに約一時間要す。

義元出発時刻 午前六時

一、義元田楽狭間着 行程約一里半

(最大速度にあらざるべし) 午前七時

一、由來記 義元が此地に未かかると頃即ち

前七時前後 持報を受く

一、今川軍休憩に務る為の所要時間 約三時間

御大将休憩地着 速くとも午前八時

一、基後の行動

捷報詳知 首実検 行賞 雨後の行勢の
軍議 朝食 かくこみする間に正午近くに
なりたるにあらざるか

一、祝宴開始 正午前後

一、田楽狭間にて義元が織田勢の鳴海方面の情報を
得たるは午前八時前後、一、諒解による

信長鳴海到着 午後二時頃

一、義元は信長の到着知らず、油断の根元動機

一、大雷雨の時刻 明ならず

由來記 午後一時前後 二度記述あり

一、合戦記 日没頃蒲州の城に引上げ、日没

もしこれが正しいならば信長は午後
あるいは速くとも正午頃鳴海に着きしより

襲した後夕刻までに約四時向ないし六時間の

間に戦斗部隊集結行軍に里熱田参拜の少くと
す時間以上カ仕事をする六時間に為したる

こととなりこれは不合理なり

一、結論

午後一時前後の大雷雨、あったとしても此

時は奇襲時期にあらざる夕刻奇襲時再び大雷雨

あり。(三回記述に注意)

夜陰と大雷雨に乗じたりとみるを至当とす

る。日没とは20日の日没頃とみるを税当とす

る。(憲兵司令官 陸軍中將 中島今朝吾

田楽狭間襲撃批判)より、

郷研のことー雑感ー

樋口清司

昨年発足以来二年目の郷研も一年生を交じえて二ヶ月余部員も増加し新段階に移りつつある今、我サークルの現状をはっきり認識し、未来への展望について考えてみた。

発足当時「郷土を知る」という漠然とした目標のもと、各人このサークルの活動意義を暗黙のうちには了解してきた。しかしこのあいまいな暗黙の了解が怠慢と惰性に陥らない為にも、この時点で改めて、自分は何を求めてこのサークルに属し、サークルをどうして活動すべきか、又郷土を知るといふことをもつと具体的に各人の心の中心とらえ、部員意志統合のビジョンを打ち立てる必要はなからうか。又曰々の活動に追われ行先を見失しなれない為にも。

そのビジョンがたとえ現実ばなれしたとしてもいものであろうと我々に強い連帯感とある活動のエネルギーや創造力を生みだしてくれるだろう。いや大きい夢程我々青年の特権だ。

自分自身何をやっているのか、一体このサークルはどうなっているのか、天安だし、全くわから

ない。明確なこのサークルの存在理(精神的論理的)が欲しい。

ただ皆と歩き廻り放歌高唱するのは実に楽しい。そういう機会を持つのが、それの分がこのサークルの目的なら、それで満足できればそれでいいのだが。

だがこのあいまいで極めて広義な郷土をどうとらえるかは実に困難で部員一人一人の興味や考え方によって一致しないのは当然である。そこからサークル統一のビジョンを描き出す事は容易な事ではない。しかも現在の活動をより発展させる中でやるべき事で活動目標がビジョンがありまいだといつて決して活動を停止してはならぬ、それこそサークル破壊の第一歩だろう。

もしサークルとして一貫性のある活動を期待するならばビジョン造りはどうしても避らねばならぬ。内面だと考える。どれほど時向がかわろうとも常に考へなければならぬと因り。

日々の活動から我々サークル独特の発想や創造、歴史社会の法則、いわゆる人文、社会科学

察しのもとに何かを導き出すれば、当然研究が我が紋られてくるだろう。そうすれば本来の郷土

を総合的に知る事はあつたかしくばろうし部々相互の興味の食糧からへ研究対象を絞れば一脱著者も出てくるに違ひない。一体我々は専門的な郷土研究家を目指しているだろうか。アマチニアとして一学生サークルとして限界を知る必要があろう。へ限界とは学生でなければ出来ない事、学生独特のもの、寧ろ積極的な意味、もちろんその限界と怠慢とはつきり区別せねばならぬ。

かといって、研究対象を絞らずに手や伸ばせばそれは知識の羅列にすぎず、郷土について表面的にただ記憶としてもっている事のみで終る可能性が多い。だが現代の状況と視みれば我々は郷土を見る事さえ忘れてゐる。書物の中の郷土を歩いて直接肌を感じる事こそ大きな意義がある。たとえ一回一回が肉連性のない活動であっても(いやむしろその中でこそ)個々の事項に肉連性を見い出し、何れかもしれぬ、又さうすることによって何かを感じ何かを得られることは確かだ。その何かとは、きり認識し、それを明確にしなければならぬ。いや認識しようと絶えず姿勢を正している。そこにサークル活動の目標を置く事も出来るだろう。

もちろんよく眺めた郷土から何らかの研究成果や法則性を取り出せる事は疑がれないし、それが理想的だ。しかしそれは対象を絞って研究するのには比喩て技術的にもはるかにあつかひだ。それ以前知識資料の蓄積によつてそれを後輩に受け継いで長年かけて研究する事もできる。しかし、後輩たちにとつて受け継ぐ資料は自前が歩いた知識ではない。それに残念ながら我々は研究の途も知らぬ。すべては出発点に立ったままだ。この困難な壁を突き破る大きな力が我々サークルに一つある。それはサークル活動の大きな意義とされてゐる人間関係である。

たった八人の同好会がもちこたえてきたのも相互理解やこの集団が作るムードのためだろう。それに少数であるゆゑ、まとまりやすく各々が山と山との交流も容易だった。我々後輩は遠慮なく先輩とこそあつた、言ひたい事を言つた、それと先輩は客と忍耐で受けとめ我々何れと分けてくれた。丁度血氣盛んは兵士もなければ兵士の様に。

こんな先輩とのつきあひもサークルの特色であり特長である。サークル活動とこんな所につまり

部員の交流と人間理解の場、友情を得る場だと考

え、それに重きを置くならば、少々の研究技術の

研究知識の乏しさを無視してもいいで

いか。ただ部員一人一人の欲望を満足させれ

ば。そう考えるのは安易な精神と怠慢の発露の産

物にすぎぬであらう。そしてただ一集団として々

ベリングと情報交換の場、暇つぶしの場となって

しまうであらう。

相互信頼と豊かな人間関係を基礎により建設的

により積極的にあるのビジョンを目標としてサーク

ルとして一貫性のある活動をするべきだ。その中に

こそ自己の建設的欲望を満足させ、自分自身が

サークルと共に成長して行くと確信する。

しかしながら、その具体的方法となると行き

詰ってしまうのが現状でいつもこれについて考え

太いに討論を重ねる必要がある。具体的にわから

ぬがさういう精神こそ忘れてはならぬ事なのだ。

以上が現在の御研への期待とやさやかな問題提

出のつもりである。

(一九六六、六)

彼の問題提起を受けて我々も討論に参加しよう。

。我サークルの目的とその方法は？その他は？

孤独

松山博

俺は孤独だ。人中にいても、他人とふざけても、映画をみても、パチンコをしていても、そつと孤独がしのびこんできた。いやむしろ、孤独を忘れる為に人と交わり、他人とふざけ、映画をみ、パチンコをしたのだ。しかし、柳に風の如くゆらりと孤独に体をかわされてしまふ。コンパの後の空しさ、バスハイクから帰った時の空しさの時には、恐らく孤独は俺の心の中で、にやりとほくそえんでいた事だろう。バイト帰りの寒い道を、オーバーの襟を立てて、こつこつと靴音を響かせて帰って来た時も又同様。一体全体、この世の中で孤独をまぎらわす為でない遊びなんて考えられぬ。人はいつも孤独を忘れ、それを目をやめる為に勉強をし、仕事をし、遊び、結局依然として孤独のままでいて、そして寂しい、寂しいと悲壮がつているのではなからうか。もしそうならば、何故かくも孤独を恐れるのだ。孤独を友とすればいいではないか。そうすれば、寂しい事なんかありはしない。いつも孤独という友達か側にいてくれるのだ。人間の友達が自分を見捨てても、

友は影の様により添っていてくれる。恋人に捨てられた、といって嘆く必要もない。いや、恋人を捜す必要もなくなるであろう。俺には恋人よりもいいらしい友（孤独）がいるから。一人ぼっちでいても寂しくないのは、人間を友としないからである。孤独の代りに書物でもよい。レコードでもよい。この俺にはビストルでもよい。とにかく、人間の友に代るべきものがない。かりと心の中に根を下した時、寂しさは雲霧消散するであろう。しかし、読書が好きでも、レコードが好きでもまだ寂しがっている人間がいるのは何故か。それは依然として孤独、即ち本やレコードもオニ者即ち対象としてみているからである。本やレコードを自身即ち自分の体の一部として感ずる事ができないでいるからである。孤独程寂しいものはない反面、孤独程愛しいものはない理由である。恋人がいても、本来の孤独はいやされぬ。孤独を恋してこそ孤独と一心同体となり得、寂しさを振り払う事ができる。孤独を愛する人が寂しそうに他人からみえるのは、孤独を愛する事のできぬ人の眼の曇りである。現代の学生はあまりに孤独を忘れ

目と心より上として戦々克々としすぎて

いる。孤独を愛する学生がいてよからう。学生は人達から、本心に澄んだ深い考へが湧き出てくるのではないか。

「学生の文化活動」

O. B. 高島英明

私達が大学の学生として如何なる事をなしていくべきかはこの大学四年、いやそれ以前にもゆくり考えてその道を定めたことはなかった。それは今から考えてずいぶん損をした様に思われる。私の学生生活の中では「学問や文化に対する義務」と「楽しめるのは学生時代」という気持の争いの中で前者が後者に敗れたのが常であった。恐らくはニク相克は人生のいつの時代にも表れ出て来ることなのかも知れない。

私達が今現在の自分の生活を見た場合、今までと同じようにその生活をしている当座には娯楽テレビ、映画、パナコン、麻雀、酒女等々いわゆる「楽しめる学生生活」の非常に魅力と手軽さにひかれる。

しかし書物を読むとか、芸術やスポーツをするとかいう智的あるいは熟練を必要とする又知識

熱練によつてよりそれが楽しめるものにはその努力の壁を打破することの困難さがゆえに手をつけるのをあとまわしにして来た。そしてその良さを本當に知るこゝのないうちに時間が過ぎ去つていった。それを打破することの出来たのはそれに対する自分自身の義務感と社会の期待の圧力に耐えられなかつたのであつた。さうだ。しかしそれ等の中でわずかに手がけたものの中から今になつてみて如何に愉快なことばかりか、たゞを感じ始めた。そしてまた私の知らない點に味うことが出来ない、そして知ることによつて愉快になることが出来る数多いものがあるはずであるし又より深く知ることによつてもっと色々な楽しみが生れるものがあるさう。

私が覚えていた「楽しさのある学生生活」はいかにその時私が愉快に感じていたとしてもそれは前途の学生生活の中でも同じように現実の苦しさがあるいは退屈さの爲の一時しのぎの行動であり賤り事や遊びにあるようでは人間尊重を無視したものである。従つて人間本来の人間相互の愛に基かない活動が深い満足と手えらるはずもあるまいしそれ自体が喜びとなるはずはない。

しかし私も含めた世の中の人の楽しさが消費ゲーム、レジャーゲームに走り憂うべき退屈的な傾向にあるへと社会の权威は述べている。これはどうしたものであらうか。それは私達の身の回りの社会の政治の保障がはいからかも知れない。又それは社会の政治の貧困の爲であるのかも知れない。社会の体制の悪さがゆえの表われかも知れない。しかし社会の傾向がいかなるものであろうとも私達学生はその端に左右されることを許されないだけの社会的地位と義務を身えられている。例えその地位が社会に於て他人より上にある為に作り上げた地位であらうとも、人生の若い時代を楽しくむづかしい位であらうと私達自身の利益の外に真実の追求を画して社会の利益の爲に役立たねばならないさう。

さうしてさういう中から創造的で人間尊重の化作りに努力すると共にさういうものの中から本質的な愉快を生み出して行かねはならない。そして色々な事を知ることによつてこのような文化が本當に愉快であることをがみしめていこうと思ふ。

のすたるじす(Nostalgis)

津坂肇隆

最初この表題を読まれた賢兄は「のすたるじす」が何の意味あるか当惑されるに違いない。そしてこれが平仮名である前からホコリだらけの国語辞典を引っぱり出された事だろう。勿論載ってはいはずはないが、片仮名で「ノスタルジア」が出てゐるのに気付かれるだろう、そう、この「ノスタルジア」からの新造語である。因みに、ウェブスターのポケット版には、「nostalgia: a longing for something far away or long ago」とある。我々人間は他の生物が刹那的に生きてゐるのとは違い、過去を考える事が出来、未来も考えそして現在も考えて生きてゐる。現在とは何かとして未来において我々は自然、人々、社会のやれどれの科学をかじつた者としてその基盤の上に立つた生活者を見ているであろう。それでは、過去においてははどうか。一日の終りに静かに自分の生活を振り返る時、良かった事悪かった事が次々と思ひ出されてくる。そしてこれらの事から未来に対する教訓を知ろうと努力した事だろう。彼らにとつては反省という事が重大な意義を持つていたのである。

所が、現代のこの高度に社会が発展した中においては、人々、特に若者においては、過去に目をむけるという事が非常に冷たさをあびる事項の一つに入れられる様になつた。彼らの行動は不安で一見衝動的と見え、思へる物である。彼らに反省を与える事が必要なのだ。彼らに過去のすばらしい事項を学ばせる必要があるのだ。

僕達はこの猿な中でいつも「ノスタルジア」を待、ていなければならぬのではないだろうか。「ノスタルジア」、それをいつも思ひつかつた大きな飛躍に身がまゐりたい。

郷研すきゃんたる(その二)

良ハクラブ作りには何よりもお互が
よく理解しあうのが第一だと思いま
す。そこで今回は卒業生を招き、多
数多忙な四年生の素顔を知りたい
と、思っています。

保坂英雄氏

経済学部経済学科

可児島ゼミ所属
瑞陵高校出身

「尾州木材」の若主人。自今の手で今の店
を名古屋一の材木問屋にするのが彼の
夢だ。と早くから語っており、卒業後
も、父の経営に打ち込み、
予定、彼の慰安的な目ざしと同様に
人格も同じ。昨日は伊藤整。今日は
ロレンスと読書に日を送る。今日か
と思つて又精神的にクラブ活動にそ
と、マジシャンに。

けたし彼の特技はお天気予報なり。

松山博氏

経済学部経営学科

塩野谷ゼミ所属
何陽高校出身

名鉄百貨店へトップの成績で入社決定
し、これからおぼろに在りかたな教養
部でも「優」を十九取ったという現代の
エリート。よく緑旗が持ち込まれると
聞く。三年の夏休みには国道一号线を
歩いて東京まで旅をしたという豪骨の
持ち主。自動車の免許は一生取らない
決意だそう。な(間イチャッタン)
保坂氏とはソーカーの中で一時彼との
間に、権兵衛党の教祖論争あり。
煙草を吸わない、ガンマニア。

鈴木弘氏

教育学部教育心理学科

成章高校出身

見方から女性本能とくすりそう
彼の顔が最近見られたいの寂しい。
風の便りでは大学院への進学も決定し
学究生活に入りれるそう。

特別さあひつろこあな

刑法ニ三十条 公然事実ヲ摘示シ人ノ名誉
ヲ毀損シタル者ハ其事実ノ有無ヲ問ハズ三
年以下ノ徴役若クハ禁錮又ハ五万円以下ノ
罰金ニ処ス。

のすたろじす第一号

発行 昭和41年12月25日

発行所 名大郷土研究会

編集人 片山勝治

山岸章

桶口清司

印刷所 学生会館印刷室